

COMPANY RESEARCH AND ANALYSIS REPORT

|| 企業調査レポート ||

NANO MRNA

4571 東証グロース市場

[企業情報はこちら >>>](#)

2024年2月20日(火)

執筆：客員アナリスト

清水啓司

FISCO Ltd. Analyst **Keiji Shimizu**



FISCO Ltd.

<https://www.fisco.co.jp>

目次

■ 要約	01
1. ビジネスモデルの変換	01
2. 最近の提携動向	02
3. mRNAの開発パイプラインの進捗状況(今期から情報開示)	02
■ 会社概要	03
1. 会社沿革	03
2. 事業概要	04
3. 特徴と強み	04
4. 後期開発リスクを負わない収益化モデルにシフト	05
■ 開発パイプラインの動向	05
1. mRNA 医薬パイプライン	05
2. mRNA 以外の開発パイプライン	06
■ 最近の提携動向	07
■ 業績動向	07
1. 2024年3月期第3四半期累計の業績概要	07
2. 2024年3月期の業績見通し	08
3. 財務状況と新株予約権発行などについて	08
■ 経営体制の強化	09

要約

mRNA 医薬の知的財産権 (IP) を創出する IP 創出企業 (IP Generator) へのビジネスモデル変換を目指す

NANO MRNA<4571> は、1996年にナノキャリア株式会社として設立されたバイオベンチャーである。2023年1月26日、COVID-19 ワクチンの成功により注目を集め、今後適応疾患の拡大が見込まれる「mRNA 医薬」に特化した IP 創出企業へのビジネスモデル転換を発表した。このビジネスモデルの転換に伴い、同年6月に社名を変更し、第2創業期としてメッセンジャー RNA (mRNA) を中心に据えた活動を開始した。

同社は2020年、mRNA 医薬などの核酸医薬を手掛けるアキュルナ(株)を吸収合併したことを契機に、次世代医薬品の中核となる核酸医薬パイプラインを獲得した。特に、mRNA 医薬は、ワクチン以外にも様々な疾患の治療薬として広く活用が可能であると考えられており、既に世界では開発競争がスタートしている。同社はアキュルナから引き継いだ mRNA 医薬開発の豊富な経験と実績を基盤に、国内パイオニアとして、mRNA 医薬に特化した研究開発に重点を置き、パイプライン候補を創出、非臨床ステージでライセンスアウトする方針だ。

mRNA 医薬の黎明期から成長期にあたるこのタイミングで、経験と実績を基に早期導出を目指すローリスクハイリターン型経営への転換を図る。既に、2023年11月には花王<4452>との包括共同研究契約の締結などを実行しており、同社の早期収益モデルへの改善に期待したい。

1. ビジネスモデルの変換

同社はアクセリードグループ企業との協業を強固にすることで創業から事業開発までの一貫体制を構築し、効率的に複数の mRNA 医薬の創薬及び IP の獲得を進め、質の高いパイプライン候補を臨床ステージに入る前に製薬企業にライセンスアウトを行うビジネスモデルへと転換した。

製薬企業各社は mRNA 医薬の医薬に関心はありつつも、知見・ノウハウの積み上げがなく、同社が製薬企業の求める mRNA 医薬のパイプライン候補を生みだし、mRNA 医薬の IP を創出する IP Generator 企業となり、製薬企業との連携を図っていく。つまり、mRNA 医薬に関する様々な技術・ノウハウを高度に駆使する“プラットフォーム”として大きく変貌した。

同社は、様々な mRNA 及び DDS 技術※やアセットを取り込み、開発パイプライン毎に最適な技術・ノウハウを集約し、変幻自在な研究開発スタンスをとることを標榜している。この自在なスタンスは、同社に様々な彩を添え、業界では新しい経営スタイルとして、“カメレオン型”の事業経営として注目されそうだ。

※ DDS (Drug Delivery System) 技術：薬剤を体内で特定の部位に効率的に届け、その有効性や安全性をより向上させる事を目的とした技術

要約

2. 最近の提携動向

同社は2023年11月、花王と mRNA 医薬に関する包括共同研究契約を締結した。花王は自社で開発した免疫制御技術を mRNA 医薬として生かすパートナーとして同社に注目し、mRNA 医薬で世界の患者へ貢献したいという両社の思いが合致した。共同研究では、アレルギー疾患をはじめとした領域で画期的な mRNA 医薬の創出に向けた研究開発を進めている。

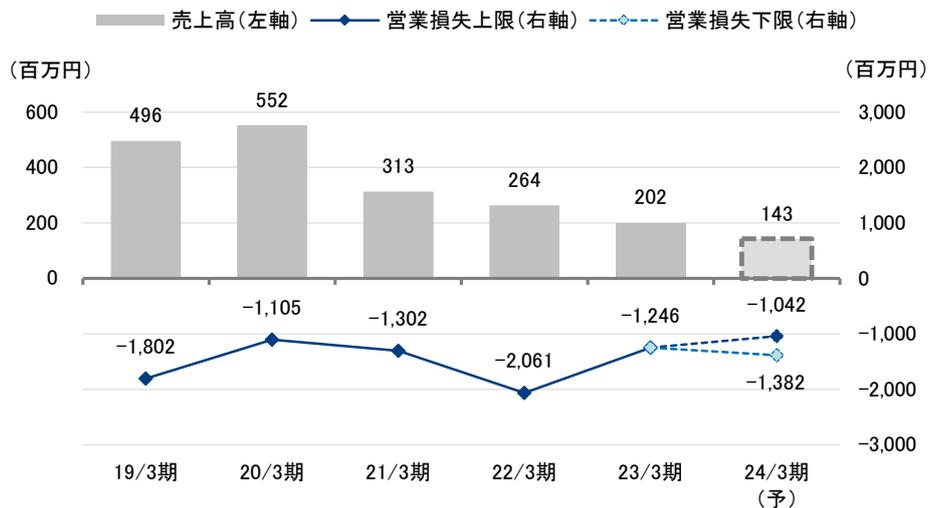
3. mRNA 医薬の開発パイプラインの進捗状況（今期から情報開示）

mRNA 医薬分野の開発は5件（前期）から2件増えて7件のパイプラインとなった。その中でも、RUNX1 mRNA（変形性膝関節症治療薬）の医師主導第Ⅰ相臨床試験開始に向けた非臨床試験が最終段階に入っている。免疫寛容誘導ワクチン（花王との共同研究）、感染症予防ワクチン（SCARDA）はパートナーとの共同開発品として、早期のIP導出の期待がかかる。一方、非 mRNA 医薬分野では乳がん（PRDM14 siRNA）の治験が進んでおり、TUG1 ASO の医師主導治験も再発膠芽腫患者を対象に2024年2月から開始された。

Key Points

- ・ mRNA 医薬の IP を創出する IP Generator 企業へビジネスモデルを変換
- ・ 花王とのアレルギー疾患向け新規 mRNA 医薬に関する包括共同研究契約を締結
- ・ RUNX1 mRNA（変形性膝関節症治療薬）は2023年度中の医師主導第Ⅰ相臨床試験開始（予定）

業績推移



注：22/3期までは非連結、23/3期より連結決算
出所：決算短信よりフィスコ作成

■ 会社概要

創薬バイオベンチャーとして必要とされる形に進化・成長

1. 会社沿革

同社は、ナノキャリア株式会社として1996年に設立されたベンチャー企業である。2000年に研究所を設置し、低分子抗がん剤のDDS製剤の実用化を目指して本格的に研究活動が開始され、2008年3月東京証券取引所マザーズ市場への株式上場を果たした。しかしながら、2022年、早期収益化を期待した導入品及び自社品の相次ぐ後期臨床開発中止に伴い、実質ゼロベースからビジネスモデルの再構築を図ることとなった。

2023年1月、同社は「mRNA医薬」の創薬に特化したベンチャーとして、新たなスタートを切った。国内では開発経験を持つ企業が数少ないmRNA医薬の創薬に注力し、高リスクの後期臨床開発は行わないmRNA医薬のIP Generator企業としての再出発である。同社は、IP Generatorモデルを推進するにあたり、アクセリドグループ企業及び(株)IPガイアとの提携により、mRNA医薬の創薬におけるmRNAの最適化、薬効評価などの創薬初期ステージから、事業開発まで一貫して実施できる体制を構築し、6月には事業内容に沿ったNANO MRNA株式会社に社名を変更した。2023年11月には花王とmRNA医薬の創薬に関する共同研究を開始するなど、既に新たなビジネスを活発に進めている。

2. 事業概要

国内ではmRNAを用いた治療薬の開発を手掛けている企業は非常に少なく、同社は国内パイオニアとしてmRNA医薬の創薬を事業の柱に据える。mRNA医薬に関するアイデアや技術を持つ産・学との共同研究を積極的に推進し、新たなmRNA医薬の開発候補品を次々と創出し、臨床試験に入るためのパッケージを提供できるIP取得を速やかに行う。そして、原則自社で臨床試験を実施せず、非臨床ステージでグローバル製薬企業などへライセンスアウトし早期の収益化を目指す。

同社はmRNA医薬パイプラインのフラッグシップとして、mRNA RUNX1の開発に取り組んでおり、ワクチンだけではなく、医薬品としての開発にいち早く乗り出している。変形性膝関節症の組織再生医薬として医師主導治験を開始する準備が進んでおり、既に非臨床開発の最終段階にある。新たな可能性を秘めたモグリティ（治療法）技術であるmRNAを用いることで、既存技術では治療できない疾患に対する根本的な治療法を提供できると期待される。

提携やM&Aについては、mRNA医薬の技術基盤の拡充を目的に積極的に進める方針である。mRNA医薬の開発パートナーであるアクセリドグループ企業との協業やその幅広いネットワークの活用とともに、共同研究開発など、企業やアカデミアとのオープンイノベーションによる多様な革新的技術を取り込むことで、mRNA医薬創薬事業の推進と拡大を進めていく。

会社概要

3. 特徴と強み

2020年、COVID-19パンデミックに対する mRNA ワクチンによって開拓された mRNA 医薬の市場規模は2022年に6兆円、2030年には16兆円になると予測されている。一方、ワクチン以外の mRNA 治療薬の上市品は未だなく、mRNA 医薬そのものが新しい創薬技術であるため、早期参入メリットが非常に大きいと考え、同社はビジネスモデル転換を決断し、mRNA 医薬の創薬に特化した。この決断の背景には、核酸医薬の創薬に特化したアキュルナを吸収合併したことにより、mRNA などの核酸領域の研究開発実績が強みになっている事実があると考えられる。

アキュルナは2016年から mRNA の研究に携わっている。国内では mRNA 医薬の研究開発を実施していた非常に貴重なベンチャーである。2020年の吸収合併時点で、開発候補品「RUNX1 mRNA」を有し、現在は当該開発品が医師主導治験入りに向けた最終段階となっている。ワクチン以外で、mRNA 医薬の臨床開発実績を持つ企業は未だ国内にはないと考えられ、国内で mRNA 医薬開発を進める上でのノウハウを保有していることは大きな優位性と言えよう。世界的な動きを見ても、今後 mRNA による治療薬創出の可能性は非常に高く、アクセリード(株)との包括提携により、mRNA 医薬の創薬に関わる製造、非臨床など研究開発の一貫体制を構築していることも大きな強みである。

4. 後期開発リスクを負わない収益化モデルにシフト

新たな mRNA 医薬の創薬ビジネスは、アクセリードグループ企業との協業による mRNA 医薬の研究開発一貫体制の構築により、製造、非臨床試験など各々の専門家集団と協業可能であり、効率的に mRNA 医薬の創薬及び知的財産の獲得を進め、臨床開発ステージに入る前に、製薬企業にライセンスアウトを行うこととしている。なお、IP 創出に関しては、IP ガイアが持つネットワークを利用して製薬企業が求める疾患に対する mRNA 医薬品の創出を実施することとしており、ライセンスの確度を高める。

非臨床段階に特化する背景には、製薬業界における非臨床段階でのライセンス活動の活発化がある。実際、非臨床段階でのライセンス契約数は、256件(2010～2014年)から423件(2015～2019年)に急増している。同社は mRNA 医薬の研究開発に6年以上取り組んできた経験と実績及び、この過程で構築したバイオベンチャーやアカデミア、日本の政府機関などとのネットワークがあることから、mRNA 医薬に関する技術及び IP 創出が可能としている。加えて、mRNA ワクチン開発において欠かすことのできない技術を持つ米 TriLink 社の元 CSO(最高技術責任者)の同社への参画をはじめとして、mRNA 医薬の技術に関する世界的にも著名な人財とのネットワーク構築及び取り込みも進んでおり、新たな mRNA 医薬パイプラインの創出に動き出している。

開発資金は自社資金50億円と政府の各種研究開発助成金獲得や共同研究先資金50億円を想定し、合計100億円程度を投入可能であると見込んでいる。自社または共同研究を通じて2～3年で IP を創出し、臨床パッケージとして開発可能なグローバル製薬企業へライセンスアウトしていく計画である。臨床パッケージまでの1件あたりの開発費用は4～8億円程度、共同研究先は製薬、非製薬、バイオベンチャー、アカデミアなどを想定している。

会社概要

収益モデルとしては、IP1件あたりのライセンスアウト収入を30～50億円程度とし、ライセンスアウト収入として契約金20億円以上を確保できれば単年度では黒字になる見込みである。なお、収入は可能な限り契約締結時に一括して得ることを考え、併せて、製品化後のロイヤリティ収益を含め、ライセンス収益がパイプライン毎に最大化できるような枠組みを組むことを掲げている。

現時点におけるプロジェクト数は、mRNA医薬パイプラインとして7件を進めている。3年後にライセンスアウトを2件程度、ライセンスアウト収入を60～100億円程度と計画している。IP創出には2～3年が必要であることから、早めに探索研究（シード）の仕込みを行うとともに、全社的なIP創出力の底上げを図っていく。

■ パイプラインの動向

mRNA 医薬を主力としたパイプラインの再編と強化

1. mRNA 医薬パイプライン

同社はその創薬研究部門、mRNA IPG ユニットを新設し、既に花王との提携など創薬活動を無事に離陸、本格稼働させ、IP Generator モデル運用の2年目となる本年には、IPを取得するとともに、協業などを活用し新たなシードを拡充、IP創出サイクルを確立し、mRNA 医薬創出力で世界の最前線に立つ段階へステップアップを果たすとしている。

(1) RUNX1 mRNA (変形性膝関節症治療薬)

RUNX1 mRNA 医薬は、ヒト転写因子 RUNX1 の mRNA を、膝関節腔内に直接投与し損傷した軟骨の再生を促進する変形性膝関節症の新しいタイプの治療薬である。本件開発のため、2021年4月、アクセリードと合併会社である(株)PrimRNAを設立し、アクセリード傘下にあるAxcelead Drug Discovery Partners(株)との協業などにより開発を推進し、現在、医薬品医療機器統合機構(PMDA)と医師主導第Ⅰ相臨床試験開始に向けた相談を進めている。なお、本プロジェクトは、国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED)の医療研究開発革新基盤創成事業(CICLE)に採択されている。

(2) 免疫寛容誘導

花王との共同研究テーマであり、花王が持つ免疫制御技術を応用したアレルギー疾患向け mRNA 医薬である。共同研究では既にモデルでの有効性を確認しており、順調にいけば2年後にはIP創出の期待がかかる。

パイプラインの動向

(3) 感染症予防

AMED の先進的研究開発戦略センター (SCARDA) 事業※に mRNA 医薬を開発するための日本発の Cap 化技術を持つ名古屋大学発ベンチャー Crafton Biotechnology(株) の mRNA ワクチンの開発が採択された。同社は、分担企業として本製剤の非臨床試験及び臨床試験を担当する。

※国防の観点から、新型コロナウイルス感染症などの対策として、戦略性を持った研究費の助成機能を強化すべく(1件当たり数十億円程度の研究助成金) SCARDA が設置されている。

(4) 皮膚疾患

加齢などに伴う皮膚組織の変性修復を行う mRNA 医薬である。ターゲットとする症状の選定と標的とする遺伝子は既に決定済みである。今後、本格的な高齢化社会が続くなか、同開発候補品への追い風が吹くと思われる。同社は、非臨床データが整い次第、研究成果を開示し、共同研究やライセンスアウトをしていく方針である。

(5) その他

眼科領域と耳鼻科領域については、既に標的疾患、標的遺伝子は決定している。これらの mRNA 医薬は First-in-class のプロジェクトのためリスクが伴うが、アンメットニーズの高い領域のため、成功すれば同社にとってかなりの利益になると期待できる。

新領域：mRNA 医薬の世界的パイオニアである米国 Moderna 社 <MRNA> を先頭に各バイオベンチャー企業の研究開発は活発に進められている。同社でも遺伝性疾患など新たな領域も検討を進めている。これらについては、バイオベンチャーとの交流を通じた技術融合なども視野に入れている。

2. mRNA 以外の開発パイプライン
(1) TUG1 ASO (膠芽腫)

TUG1 ASO 医薬 (膠芽腫) は、脳腫瘍の中でも特に悪性度が高い膠芽腫 (こうがしゅ) を適応症とする ASO (アンチセンスオリゴ) 医薬である。本件は、国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学が、AMED の「革新的がん医療実用化研究事業」に 2 期続けて採択されているプロジェクトであり、2024 年 2 月に医師主導治験 (治験責任医師：名古屋大学大学院医学系研究科脳神経外科学 齋藤竜太教授) が開始された。同社は、これまでも参画機関として治験薬の製造法の確立及びその供給と非臨床試験を実施してきており、引き続き、製剤の供給を行う。

(2) 乳がん：siRNA/PRDM14

本件の医師主導治験は、最高用量レベルまで進捗し、安全性、有効性の確認と併行して、血中動態の解析が進んでいる。なお、PRDM14 で使用する新たなポリマー DDS (片岡一則博士が発明した新規ポリマー技術) は、2024 年 1 月に医師主導治験 (名古屋大学) が開始された TUG1ASO にも用いられており、PRDM14 のヒトにおける安全性及び薬物動態の成績は TUG1ASO にとっても重要であり、追い風となる可能性がある。

最近の提携動向

花王と包括共同研究（アレルギー疾患向け新規 mRNA 医薬）

同社は2023年11月14日、花王と mRNA 医薬に関する包括共同研究契約を締結した。花王は、生命科学領域の研究を深化させ、mRNA 医薬に応用可能な免疫制御技術「SNAREVAX™（スネアボックス）※を開発した。花王では本技術を生かすパートナーとして同社に注目し、mRNA 医薬で世界の患者へ貢献したいという両社の思いが合致し、2022年から、新規 mRNA 医薬の開発に向けた SNAREVAX™の有効性検証を共同で行ってきた。共同研究では、アレルギー疾患をはじめとした領域で画期的な mRNA 医薬の創出に向けた研究開発を進めており、本共同研究の成果を順次グローバルに導出することを計画している。

※ 抗原に対して特定のタンパク質を融合した核酸配列設計を採用することで、その抗原に対する免疫応答を促進することが期待される技術のこと。「SNAREVAX™」は花王が商標登録出願中。

業績動向

IP Generator 企業への変貌を目指し、ウィズ・パートナーズとの資本関係を強化

1. 2024年3月期第3四半期累計の業績概要

2024年3月期第3四半期累計の連結業績は、化粧品材料供給収入、ライセンス収入及び共同研究開発契約収入などにより売上高が104百万円、営業損失が687百万円、経常損失が663百万円、親会社株主に帰属する四半期純損失が737百万円となった。なお、営業外収益、営業外費用及び特別損失の主な要因としては、外国為替相場の変動による為替差益22百万円、第21回新株予約権の発行費9百万円、建物附属設備の減損処理による減損損失70百万円があげられる。

2024年3月期第3四半期累計 連結業績

	23/3期3Q累計	24/3期3Q累計	増減額
売上高	142	104	-38
売上原価、販管費	1,234	791	-443
研究開発費	980	520	-460
営業損失	-1,092	-687	405
営業外収益 / (費用) ネット	73	23	-50
経常損失	-1,019	-663	356
親会社株主に帰属する 四半期純損益	-999	-737	262

出所：決算短信よりフィスコ作成

業績動向

2. 2024年3月期の業績見通し

2024年3月期の連結業績は、第2四半期までの実績をもとに通期着地見込みを精査した結果、業績予想の修正が必要と判断したため、前回発表した業績予想を修正した。既存パイプラインの開発が進んでいるものの、新たな mRNA 医薬のシーズ探索事業に係る研究開発費の予想値が当初のレンジ予想値(816 百万円～1,150 百万円)の下限値を下回る見込みから、営業利益、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益がそれぞれ当初のレンジ予想値を上回り、売上高 135 百万円、営業損失 979 百万円、経常損失 883 百万円、親会社株主に帰属する当期純損失 945 百万円として修正した。

2024年3月期連結業績予想

(単位：百万円)

	23/3 期 実績	24/3 期 予想	増減額
売上高	202	135	-67
売上原価、販管費	1,448	1,115	-333
研究開発費	1,120	758	-362
営業損失	-1,246	-979	267
経常損失	-1,104	-883	221
親会社株主に帰属する 当期純損失	-1,310	-945	365

出所：決算説明会資料よりフィスコ作成

3. 財務状況と新株予約権発行などについて

2024年3月期第3四半期の財務状況については、資産は、投資有価証券の減少などにより前期末に比べ615百万円減少し、5,169百万円となった。負債は、主に流動負債の「その他」に含まれる預り金の増加などにより、同161百万円増加し、1,692百万円となった。また、純資産は、親会社株主に帰属する四半期純損失の計上による利益剰余金の減少などにより同776百万円減少し、3,476百万円となった。

資金調達

2023年1月、ウィズ・パートナーズに対して発行済の転換社債型新株予約権付社債に関して、条件変更（リファイナンス）などを実施した。同社では2023年1月に「IPジェネレータモデルへの転換」を宣言。それに伴い、mRNA 医薬の研究開発を推進するための資金調達の強化を行った。第6回無担保転換社債型新株予約権付社債※のリファイナンス、そして、第20回新株予約権を発行し、これにより新株予約権がすべて行使された場合は資金調達額1,580百万円を見込んでいる。一方、新規 mRNA 医薬の研究開発を推進するための資金調達として、5月には第21回新株予約権を発行した。割当先は、業務・資本提携である IP ガイアとアクセリードであり、新株予約権がすべて行使された場合は資金調達額合計1,000百万円（各々500百万円）を予定している。

※ウィズ・パートナーズが業務執行組合員を務める THE ケンコウ FUTURE 投資事業有限責任組合を割当予定先とする第三者割当の方法による第6回無担保転換社債型新株予約権付社債1,108百万円を募集。資金調達の目的は、(1) mRNA 医薬品開発の推進(950百万円)、(2) TUG 1 ASO の治験・導出活動費用(200百万円)である。

■ 経営体制の強化

秋永士朗（あきながしろう）氏は、2022年12月16日に同社の代表取締役社長 CEO に就任、研究開発本部長 CSO も兼務し、一人三役を担ってきた。2023年には優秀な中核人財獲得し、それぞれが執行役員研究開発本部長 CDO、執行役 CSO に赴き、秋永氏が CEO に専念できる体制となった。ここにきて、経営者の右腕・左腕が揃い、社長付部長を含め、ビジネスとしての研究開発を中心に将来を見据えた強力な経営チームが編成されつつある。経営チームは、同社の Mission である “Robust foundation for Drug Discovery Concert” の実現に向けて戦略的かつ目標を明確化したな中期経営計画策定に取りかかっている。

社名変更について

同社は2023年6月に、創業以来23年間慣れ親しんできた「ナノキャリア」から「NANO MRNA」へ社名を変更した。旧社名のナノキャリアは“キャリア”（薬物の運び屋）という単語が示す通り、DDS 技術の会社というイメージが強かった。同社は同年1月に「mRNA 創薬の IP ジェネレータモデルへの転換」を宣言したことで、“mRNA 創薬”の会社であることを明確にする意図があったようである。“名は体を表す”と言うが、「NANO MRNA」に改称したことを契機に、世界で開発競争がスタートした mRNA 医薬の創薬分野に国内企業に先駆けて進出し、独自の市場ポジションを名実ともに確立することを期待したい。同時に、会社ロゴもユニークに刷新された。同社にその真意を尋ねたところ、“夢が詰まっている”会社が一目でイメージでき、誰からも親しまれる可愛い会社にしたいとのこと。また、「mRNA 医薬の創薬プラットフォームとして、様々な技術やアセットを取り込んで開発パイプライン毎に様々な色に変貌する」「“ドラえものの四次元ポケット的”な発想を常に持ち、一般の創薬ベンチャー企業とはひと味違った、創薬シーズと医療・開発ニーズをつなぐプラットフォームの存在」を表現したかったようである。

“カメレオン型”経営スタイルとして注目

旧来型の創薬バイオベンチャーのビジネススタイルでは、保有する得意技術で創薬開発が成就しなかった場合、その会社自体が崩壊してしまう技術偏重リスクがつきまとう。一方、同社がこれから取り組もうとしている「mRNA 医薬の創薬プラットフォーム」という考え方は、mRNA 医薬の創薬ビジネスを展開する上で、その取り組み方には数多くの選択肢があり、それらを組み合わせることにより、変幻自在にビジネス形態を変えることを意味する。具体的には、正しい標的（創薬ニーズ）に対して、mRNA の成分や構造体、DDS を正しく設計する。並行して、保有するネットワークの中から、当該創薬ニーズに対してより最適な開発スキーム（産産、産学、自社）を選択する。そうすることで、不透明・不確実なバイオ医薬の創薬に常につきまとう事業環境変化に対し、柔軟にかつ迅速に適応できるようになり、ローリスクハイリターンなパフォーマンスが得られる。今後、創薬バイオベンチャー業界では新しい経営スタイルとして、“カメレオン型”の事業経営が注目されそうである。

重要事項（ディスクレマー）

株式会社フィスコ（以下「フィスコ」という）は株価情報および指数情報の利用について東京証券取引所・大阪取引所・日本経済新聞社の承諾のもと提供しています。

本レポートは、あくまで情報提供を目的としたものであり、投資その他の行為および行動を勧誘するものではありません。

本レポートはフィスコが信頼できると判断した情報をもとにフィスコが作成・表示したのですが、フィスコは本レポートの内容および当該情報の正確性、完全性、的確性、信頼性等について、いかなる保証をするものではありません。

本レポートに掲載されている発行体の有価証券、通貨、商品、有価証券その他の金融商品は、企業の活動内容、経済政策や世界情勢などの影響により、その価値を増大または減少することもあり、価値を失う場合があります。本レポートは将来のいかなる結果をお約束するものでもありません。お客様が本レポートおよび本レポートに記載の情報をいかなる目的で使用する場合においても、お客様の判断と責任において使用するものであり、使用の結果として、お客様になんらかの損害が発生した場合でも、フィスコは、理由のいかんを問わず、いかなる責任も負いません。

本レポートは、対象となる企業の依頼に基づき、企業への電話取材等を通じて当該企業より情報提供を受けて作成されていますが、本レポートに含まれる仮説や結論その他全ての内容はフィスコの分析によるものです。本レポートに記載された内容は、本レポート作成時点におけるものであり、予告なく変更される場合があります。フィスコは本レポートを更新する義務を負いません。

本文およびデータ等の著作権を含む知的所有権はフィスコに帰属し、フィスコに無断で本レポートおよびその複製物を修正・加工、複製、送信、配布等することは堅く禁じられています。

フィスコおよび関連会社ならびにそれらの取締役、役員、従業員は、本レポートに掲載されている金融商品または発行体の証券について、売買等の取引、保有を行っているまたは行う場合があります。

以上の点をご了承の上、ご利用ください。

■お問い合わせ■

〒107-0062 東京都港区南青山 5-13-3

株式会社フィスコ

電話：03-5774-2443（IR コンサルティング事業本部）

メールアドレス：support@fisco.co.jp